ISSN1883-5171

SPARC® Japan NewsLetter NO.4

2010年3月

CONTENTS | 特集記事 | トピックス | 活動状況

Feature Article
特集記事 1 P1 →

デジタルリポジトリ連合国際会議2009開催報告

「オープンアクセスリポジトリの現在と未来 ―世界とアジアの視点から」と題された第2回国際連合会議についての内容を中心とした開催報告です。

Topics
トピックス 1 P6 →

わが機関リポジトリを語る 第3回 広島大学

大学図書館から各リポジトリの現場の状況、研究者からの意見などを掲載します。

Topics
トピックス 2 P7 →

日本の学術誌 第3回 日本数学会

日本の学術誌の状況や、学会はそのジャーナルをどう伸ばしていきたいかなどをご覧いただけます。

Activity report
活動状況 P8 →

イベント参加報告

「第5回SPARC Japanセミナー2009」、「第7回 SPARC Japanセミナー2009」と「APBioChEC'09」の参加報告を掲載しています。

■ デジタルリポジトリ連合国際会議2009開催報告

内島　秀樹（うちじま　ひでき／金沢大学情報部）

●はじめに

去る2009（平成21）年12月3日、4日の2日間にわたりデジタルリポジトリ連合国際会議2009が開催された。デジタルリポジトリ連合国際会議は、英文表記では、Digital Repository Federation International Conferenceであり、これを縮約してDRFIC2009（ダーフィック2009）と呼んでいる。以下、DRFIC2009の開催概要について報告する。

●デジタルリポジトリ連合について

DRFは、2005（平成17）年に国立情報学研究所（以下NII）によるCSI委託事業の一つとして、北海道大学、千葉大学、金沢大学の3大学（の附属図書館）によって開始された機関リポジトリ（Institutional Repository、以下IR）の運営者のための連携活動である。連合と銘打っているが、連合組織としての参加規約などはなく、リポジトリ運営のための相互支援を目的として開始された緩やかでボランタリーな活動体である。2010年1月現在、日本国内の87の高等教育機関が趣旨に賛同して、活動への積極的な参加や直接・間接の協力・支援を行っている。

DRFは、多様な情報共有活動を行っており、Wikiやメーリングリストを通したIR運営やオープンアクセスに関する情報共有、多様な地域での多様な規模のワークショップ開催などが活動の核をなしている。過去のDRFの活動（平成18～19年）については、日英両言語で報告が公開されているので参照願いたい。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Digital%20Repository%20Federation（日本語）

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Digital%20Repository%20Federation%20%28in%20English%29（英語）

●DRFIC2008について

DRFは活動の一つとして、デジタルリポジトリ連合国際会議2008（Digital Repository Federation International Conference2008＝DRFIC2008）を2008（平成19）年1月に開催した。これが第1回のDRFICであり、今回のDRFIC 2009は第2回目に当たる。

DRFIC2008は、大阪大学附属図書館、国立情報学研究所、大学図書館近畿イニシアティブ、REFORM研究グループ（研究代表者/土屋千葉大学教授）の共催、文部科学省の後援を受けて、200人前後の内外の大学図書館関係者、出版関係者、研究者などの多様な参加者を集めて、大阪大学医学部銀杏会館で開催された。大学図書館関係の会議としては珍しい英語のみによる‘国際’会議を行った。内容は下記を参照されたい。

http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/DRFIC2008/index_ja.php（DRFIC2008）

●DRFIC2009の概要

DRFIC2009は、アメリカのSPARC、文部科学省、国公私立大学図書館協力委員会、国立大学図書館協会、公立大学協会図書館協議会、私立大学図書館協会の後援を得て、新築なったばかりの東工大蔵前会館を会場として、SPARC Japanとの共同主催、東京工業大学附属図書館との共催で開催された。SPARC Japanは国内学協会誌の国際発信力強化等を目的としたNIIの事業であり、平成22年度からの第3期に向けて、「オープンアクセスの推進」を大方針とし、我が国の特色に見合ったオープンアクセスを学会と図書館が車の両輪となって推進することとしている。

DRFIC2009の企画立案はDRF参加機関のリポジトリ担当の大学図書館職員等から構成された実行委員会が行い、実行委員長は千葉大学の土屋俊教授、副委員長は常磐大学の栗山正光准教授が務めた。また、開催館である東京工業大学附属図書館をはじめとして、首都圏の7大学が地域組織委員会を構成して当日の会場運営を中心的に担った。

全体参加者数は174名で、講演者を含めた外国人参加者数は8名、日本人参加者数166名、参加国数はこれも講演者を含めて8カ国であった。

DRFIC2009は、「オープンアクセスリポジトリの現在と未来―世界とアジアの視点からー」と題して、IRの運営だけでなく広くオープンアクセス運動をも対象として、日本とアジアを世界の視点から見直すとともに世界の動きをアジアの観点から理解する、という双方向の視点を共有することを目的として開催された。

次のページへ

このメインテーマの下、開会と閉会の2つの基調講演、3つのセッション、ポスターセッションから会議は構成された。使用言語はDRFIC2008と同じく英語のみであった。

開会基調講演は、土屋 俊実行委員長が「こんどは何？－出版と図書館を超えて」と題して行った。

セッション1は、「成熟と展望：電子環境下の科学・研究・出版」と題して、土屋俊実行委員長が座長を務めた。講演者はCERNのサルバトレ・メレ博士、スペイン国立通信教育大学のアリシア・ロペス・メディナ氏、アメリカ公立大学協会の副会長のディビッド・シュレンバーガー博士の3氏で、すべて招聘者であった。

セッション2は、「アジア太平洋地域における機関リポジトリの現状と展望」と題して、竹内 比呂也千葉大文学部教授が座長を務めた。講演者は南クイーンズランド大学のピーター・セフトン氏、台湾中央研究所の林誠謙博士、筆者の3名で、セッション1と同じくすべて招聘者であった。

セッション3は、「多様性への姿勢」と題して、栗山正光実行副委員長が座長を務めた。講演者はロチェスター大学のスーザン・ギボンズ氏、クランフィールド大学のサイモン・ビーバン氏、香港大学のディビッド・パーマー氏、国内から筑波大学大学院の佐藤 翔氏、小樽商科大学の鈴木 雅子氏、物質・材料研究機構の谷藤 幹子氏の合計6名であった。このうち、ギボンズ氏、ビーバン氏は招聘によるものである。

閉会基調講演は、共同開催者であるSPARC Japanから安達 淳NII学術推進部長が「NIIのCSI事業：その成果と展望」と題して行った。

●各セッションの概要

1. 開会基調講演

土屋俊実行委員長による基調講演は過去5年間の日本のIRの歴史に触れて、IRの運営実績と図書館員による活動の拡大という2つの観点から成功であったこと、しかし他の国と同じく研究者の理解は遅々として進んでいないことを指摘し、今後の課題として、リポジトリのインフラ整備のための国際連携の必要性と研究者サイドにおける人文科学の役割の重要性に言及した。

2. セッション1

サルバトレ・メレ氏は、「高エネルギー物理学における学術情報流通のイノベーションとオープンアクセス」と題して発表を行った。

メレ氏の講演は高エネルギー物理学におけるオープンアクセスを、伝統、ツール、利便性、出版の4つの観点から要約する。伝統とはプレプリント文化を指し、嚆矢としてスタンフォード大学のSLAC図書館によるプレプリントリスト、最初の電子化目録であるSPIRESが例示

質疑に答えるセッション1の講演者

発表者及び座長による集合写真

される。ツールとはarXiv.orgである。オープンアクセスの利便性はプレプリントサーバによる引用度の飛躍的な向上を指す。特徴的なのは、引用のピークが論文としての出版前に来ていることで、2年間という期間における引用の20%が出版前に起きていることが指摘された。出版に関しては、高エネルギー物理学分野のイニシャチブであるSCOAP3が紹介された。主要国のコンソーシアムや研究助成団体がSCOAP3に参加を表明しており、日本の図書館コミュニティも重要なステークホルダーであることに言及された。

アリシア・ロペス・メディナ氏は、「データ中心科学のためのデータリポジトリ・インフラ」をテーマに発表を行った。メディナ氏は、デジタルリポジトリの役割は変わりつつあるとして、これまでのドキュメント中心のIRから、データ中心のIRへと変化することが必要と指摘する。データ中心のIRは、グリッドなどのネットワークを基盤として科学情報の共有と科学者によるバーチャルコミュニティの形成のためのインフラとなる。ヨーロッパにおいては、ECの第7次科学技術基本計画の助成により、D4SCIENCEなどのE-Science実現のための複数プロジェクトが進行しており、IRはそのための手段となる。また、IRが情報ネットワークの1ユニットとしてバーチャルナコミュニティに組み込まれて相互利用されることを前提とすると、IRのコミュニティにとって、恒久識別子、オブジェクト同士のセマンテックや相互運用性（OAI-ORE）などが今後の課題となる。最後に10月に設立されたオープンアクセスリポジトリ連合（COAR）が紹介された。

ディビッド・シュレンバーガー氏は、「研究成果の展開・普及のために不可欠なリポジトリの役割」をテーマに発表を行った。シュレンバーガー氏は、1990年代に自ら提案したNEARという研究成果を網羅するリポジトリを回顧し、その機能を実現したのがNIHやウェルカムトラストなどの政府機関や助成機関（による政策）だったと指摘した。しかし、そうしたリポジトリは生医学など一部の主題をカバーするだけなので、IRによって機関の研究成果の包括的な義務化を行うことが望まれる。アメリカではハーバードやMITなどが義務化を実施しており、他大学や学術雑誌への影響は大きい。また、オープンアクセスより、公開までのエンバーゴを認めるパブリックアクセスの方が、学術出版社が任務とする査読機能との共存が可能であることに注意すべきである。大学で行われている研究は大学外の納税者からは見えにくく、これが義務化によってすべて公開されることは視認性を高める大きなメリットを有する。最後に、アジア、日本も含めて世界の研究大学が研究成果のセルフアーカイブ（投稿）を義務化していくことが今後望まれると結論づけた。

3. セッション2

ピーター・セフトン氏は、「アジア・オセアニア地域における協力への提案：国内協力活動・標準化の評価から」と題して発表を行った。オーストラリアでは、政府の援助及び政府助成金によるARROWなどのプロジェクトがオーストラリアのリポジトリを支援してきた結果、IRは39の全大学に設置されている。オーストラリアにおけるIRの目的は、オープンアクセス、研究成果の政府への報告義務、研究成果のショウケース、デジタルコンテンツの保存などである。また、セフトン氏から、オーストラリアにおけるこれまでの経験を踏まえて、データのマイグレーション、政府による支援、IRのソフトウエアを超えた協力、コミュニティのためのフォーラム、多様なメタデータスキーマが処理可能なソフトウエアの必要性などについて提案が行われた。

林 誠謙 氏は、「台湾における機関リポジトリのこれから」と題して発表を行った。

林氏は、デジタルアーカイブ、リポジトリ、e-Infrastructure、コンテンツマネジメントシステム（CMS）の複数の観点から、台湾の状況を概観した。台湾では、TELDAP（Taiwan e-Learning and Digital Archives Program）というプロジェクトが、NDAP（National Digital Archive Program）とELNP（e-Learning National Program）の2つから構成され、6年間にわたり実施された。6年間で5億USドルを投入して、幅広い主題のコンテンツを網羅してデジタル化し、現在200万件以上のフルテキストが公開されている。電子ジャーナルに関しても、SDOSプロジェクトが1995年からエルゼビアの電子ジャーナルのミラーサイトを運用しており、台湾国内の大学図書館のため、2330ジャーナルの3,954,761論文のダークアーカイブをホストしている。

IRに関しては、台湾教育省からの資金提供をうけ、2006年からプロジェクトが開始された。現在95の大学図書館が連携して、改良したDspaceを利用している。

e-Infrastructureに関しては、歴史的に見れば科学のパラダイムは実験科学から理論科学、コンピューターサイエンスへと進化しており、現在はデータ中心のe-Science

が新たな科学研究のパラダイムとなっている。現在、台湾やアジア・オセアニア地域において運用可能なe-Scienceの基盤として、グリッド・ネットワークであるTWGrid、EUAsiaGridなどが稼働している。

筆者（内島）は、「DRFイニシャチブの前後」と題して発表を行った。NIIによるCSI事業は領域1・2の2つに分けて実施されており、領域1による個別機関でのIR運用と領域2による開発プロジェクト群が相互に緩やかな支援環境を作り上げて、IRの人的・システム的ネットワークを作り上げていることを指摘した。

4. 第3セッション

スーザン・ギボンズ氏は、「文献提供者を理解し、よりよいリポジトリをデザインする」と題して発表した。ギボンズ氏は、所属するロチェスター大学で、DSpaceへの付加機能として開発された著名な研究者ページの考案に至った過程について報告した。ロチェスター大学では、研究者を人類学的手法によって調査し、研究者のニーズを把握した。このニーズを踏まえて開発されたのが研究者ページである。これは、研究者が論文の著者として必要な文書作成・保存の諸機能をカスタマイズしたものである。ロチェスター大学では、研究者ページの機能をさらに強化して、IR＋と呼ばれるオープンソースを開発している。

サイモン・ビーバン氏は「アドボカシー、コンテンツ獲得、そして研究プロセスにおけるリポジトリ」と題して発表した。クランフィールド大学では、2003（平成14）年にDSpaceをプラットフォームとして、IRを立ち上げたが、登録率は伸びず、セルフアーカイブに対する理解（up-take）も進捗しなかった。そこで、JISCの助成に応募して研究者の行動の文化的変容をテーマとするEmbedプロジェクトを開始した。プロジェクトでは、トップダウンとボトムアップの両方の広報戦略を採用するとともに図書館員の積極的な活動によりコミュニティ形成を行った。このプロジェクトにより、登録率は2007年以降大幅に上昇している。イギリスでは、研究評価フレームワーク（RAF）が実施されることになっており、そのため、クランフィールドではIRも研究者情報システムの中に組み込まれる予定である。

質問に答えるスーザン・ギボンズ氏

佐藤 翔氏は、「機関リポジトリにおけるワーキングペーパーの利用にRePEcが与える影響」と題して講演した。佐藤氏は一橋大学とアジア経済研究所の2つのIRと経済学の主題リポジトリであるRePEcに登録されたワーキングペーパーのダウンロードを分析した。佐藤氏の分析では、2つのIRとRePEcに登録されたワーキングペーパーを比較するとIRのコンテンツはRePEcに登録された直後から高いダウンロード率を示しており、経済学分野の研究者にとって主題リポジトリのインパクトは大きいことを実証している。

小樽商科大学の鈴木 雅子氏は、「IRとILLDDを交差させる」と題して発表した。NACSIS-ILLによる複写数のトップは最近3年間のログによると大きな変動はない。また、内容的には看護学等の日本語文献が多いが、これらはインターネット上で利用できないものが多く、論文に対する複写ニーズを論文の執筆者に報知して、リポジトリへのセルフアーカイブのモチーフにすることが重要であると指摘した。

谷藤 幹子氏は「NIMS eSciDocにおけるe-Science展開」と題して講演した。物資材料研究機構では、IRプラットフォームであるeScieDoc上のFACESと呼ばれるシステムや、Fedoraとの連携により、画像データの保存などe-Scienceへの対応を進めている。

香港大学のディビッド・パーマー氏は、「研究者ページ：機関の方針に対する研究者の賛同」と題して、香港大学が所属研究者に参加を義務付けている知識交換の実施のためにIRに導入した研究者ページを紹介した。研究者ページは、Scopusなど書誌データベースの引用回数をインポートする機能などを実装している。

次のページへ

5. ポスターセッション

大学から14、研究機関から3の合計で17のエントリーがあった。展示されたポスターは下記のURLで公開しているので参照願いたい。全講演が終了後、優秀なポスターに対する表彰が行われ、最優秀ポスターには千葉大及び筑波大の佐藤氏が選出された。

6. 閉会基調講演

SPARC Japan（国立情報学研究所）から、安達 淳 教授が「NIIのCSI事業：その成果と展望」と題して講演した。日本のIRがCSI事業により急激に成長し、地域共同リポジトリによる参加数を含めると154機関がリポジトリを運営していること、CiNii、JAIRO、NII-ELS、J-STAGE、IR、KAKEN等のデータベースによりナショナルな情報流通環境が形成されつつあることを指摘し、さらに今後の課題として我が国におけるIRを持つ機関数の増加の必要性、公的助成資金による研究成果投稿の義務化の可能性などについて言及した。

会議資料は先を参照：http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRFIC2009#qcdfdd88

安達教授の講演風景

ポスターセッション（NIMS）

ポスターセッション（ShaRe）

最後に、DRFIC2009の運営を担った地域組織委員会及び東京工業大学附属図書館の皆さん、そして財政支援を頂いた国立情報学研究所及びSPARCに対して、実行委員会を代表してお礼申し上げる。

（2010年1月22日）

CONTENTS へ

■ わが機関リポジトリを語る
広島大学学術情報リポジトリ／広島県大学共同リポジトリ

尾崎　文代（おざき ふみよ／広島大学図書館企画調整（兼）学術情報リポジトリ主担当）

第３回

広島大学

広島大学には、「わがリポジトリ」と呼べる機関リポジトリが二つあります。

一つは「広島大学学術情報リポジトリ（HiR：Hiroshima University Institutional Repository）」。広島大学の研究成果を蓄積・公開する機関リポジトリです。もう一つは「広島県大学共同リポジトリ」。愛称をHARP（Hiroshima Associated Repository Portal）といい、広島県大学図書館協議会加盟館が共同で運営をしている共同リポジトリです。広島大学は同協議会の代表幹事館としてその管理運営にあたっています。

HARPは、HiRが本稼動を始めた2006年10月、広島県内の８大学により、県内で一つのリポジトリを共同運営するための実験プロジェクトとしてスタートしました。発足当初、国内では十数の大学で機関リポジトリが運営されていたに過ぎず、また、実験を持ちかけた広島大学のリポジトリも、本稼動を始めたばかりで軌道に乗っているとは言えませんでした。このような状況下、中小規模機関での共同運営が本当に可能なのか、広島大学も参加大学も、雲をつかむような気持ちで始めた実験であったとも言えます。

しかしその後、実務研修やソフトウェアの検討を繰り返してノウハウを蓄積し、運営体制の方も、有志の実験プロジェクトから2007年７月に広島県大学図書館協議会の正式事業として進展・確立したのち、2008年４月に県内11大学の参加で正式公開に至りました。現在は12大学が参加して運用を行っています。

機関リポジトリの共同構築は、技術・費用を共有することで自力構築困難な中小規模機関のリポジトリ構築を可能にし、オープンアクセスの裾野拡大に有効であると考えられています。技術やノウハウの普及により、年々、機関リポジトリ構築の敷居は下がってきていますが、2006年当時にHARPの構築が実現する要因となったものは、技術・費用の共有はもちろんのこと、予算や人員削減の厳しい状況下であるからこそ新しい事業に挑戦し目標を見つけようという、県内大学の前向きな姿勢であったと思います。勉強会からスタートしたHARPでは、現在も定期的に勉強会を開催して情報共有および相互連携を深めています。そして、この勉強会こそが、HARPの基盤を形成し継続運用へと導く原動力となっているのです。

広島大学はHARPのサポーター的立場にありますが、広島大学にとってHARPに関わることは、共同リポジトリの運営という新しい課題のみならず、機関リポジトリそのものの運営課題を解決するスキルの取得にもつながっています。さらに、これらのスキルは、自機関のリポジトリHiRの運営にも活かされており、二つのリポジトリは向上し合う相互関係にあると言えます。

このHARPの成果に基づき、2008年からスタートした共同リポジトリプロジェクト（愛称ShaRe：国立情報学研究所CSI委託事業 代表機関：広島大学）では、複数の大学と連携し、共同リポジトリのシステム面・運営面での課題解決と担当者育成を行うことで、国内への普及を図る活動を行っています。2010年現在、国内で稼働している共同リポジトリは、山形・新潟・埼玉・福井・岡山・広島・山口・沖縄の８県域にのぼり、構築を検討する地域も増加しつつあります。これらの共同リポジトリが中小規模機関の研究成果公開に占める割合は極めて高く、運用中の機関リポジトリのうち、公・私立大学では約半数、短大・高専はほぼ100％が共同リポジトリの参加機関となっています。

共同リポジトリは、その構築を核として、学術機関の地域連携の強化および、地域のコミュニティ活動の活性化に貢献していると言えます。今後、技術の進歩により共同リポジトリの形式も多様化していくものと予想されますが、機関リポジトリの持続的な運用に、地域レベルのコミュニティ活動が欠かせないものであることに変わりはないと考えています。

わたしたちは、この「わたしたちのリポジトリ」の輪を、これからも拡げていきたいと思っています。

■ 日本の学術誌

河野　俊丈（こうの　としたけ／日本数学会）

第３回

日本数学会

The Mathematical Society of Japan

学　会　名	社団法人　日本数学会
設立年月日	1877年（明治10年）に東京数学会社として設立
会　員　数	個人会員：5,074名　　法人会員：27口（2010年1月29日現在）
ジャーナル名	Journal of the Mathematical Society of Japan (JMSJ) Japanese Journal of Mathematics (JJM) 雑誌「数学」
分　野	純粋数学
使用するプラットフォーム名／URL	● Project Euclid　● J-STAGE　● Springer ［JMSJ］http://projecteuclid.org/jmsj（Project Euclid） http://www.jstage.jst.go.jp/browse/jmath (J-STAGE) ［JJM］ http://www.journalarchive.jst.go.jp/english/jnltop_en.php?cdjournal=math1924（第２シリーズのみ at Journal@rchive） http://www.springer.com/math/journal/11537（第３シリーズのみ at Springer） ［雑誌「数学」］ http://www.journalarchive.jst.go.jp/english/jnltop_en.php?cdjournal=sugaku1947（Vol. 1 ～ Vol. 58 at Journal@rchive）
電子ジャーナルスペック	全文PDFファイル、引用文献、書誌事項
電子投稿システム	使用していない
著作権ポリシー	原則として、査読後の著者最終版と出版社版（猶予期間厳守の上で）の機関リポジトリへの掲載を許可している。いずれも要許諾。

数学会の学術誌の紹介

日本数学会では、1948年創刊の総合的な数学の欧文誌Journal of the Mathematical Society of Japan（JMSJ）をはじめ、次のような学術誌を発行している。「数学」は日本数学会が設立された翌年1947年から、毎年４回発行されている邦文誌で、論説、企画記事、書評などを掲載している。論説は、非専門家の人にも理解できることを目的として書かれた解説記事である。JMSJと「数学」は数学会会員に配布されているが、「数学」は岩波書店刊行のものを購入することも可能である。1924年創刊のJapanese Journal of Mathematics（JJM）は、継続して発刊されている日本の数学欧文誌の中で最古のものであり、2006年から、高木レクチャーで講演された内容などを含めて、創造性に満ちた研究総説に特化した新シリーズとして刊行されている。Advanced Studies in Pure Mathematics（ASPM）は1983年に創刊され、日本数学会によって主催された国際研究集会等、重要な研究集会の報告論文集である。また、MSJ Memoirs・数学メモアールは、英文と和文の両方があり、数学の新しい潮流を解説するモノグラフである。これらの学術誌に投稿された論文は、すべて専門家によって査読され、それらの質の高さは国際的にも広く認知されている。

ウェブ公開と販売状況など

JMSJはJ-STAGEおよびProject Euclidでオンライン公開が行われている。「数学」およびJJMはJSTのJournal@rcive事業によって、電子化・無償公開が進んでいる。また、「数学」の論説の多くは英訳され、アメリカ数学会からSugaku Expositionsという雑誌名で発行されている。ASPMとMSJ Memoirs・数学メモアールは日本数学会で販売されているほか、海外では、ASPMはアメリカ数学会で、MSJ Memoirsはアメリカ数学会とWorld Scientific社でも販売されている。

■ 活動状況［イベント参加報告］

「第5回 Sparc Japan セミナー2009」に参加して
テーマ：オープンアクセスのビジネスモデルと研究者の実際

岡部　晋典（おかべ　ゆきのり／筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科）

ぼくはどこにでもいる一介の大学院生である。図書館情報学の周辺をうろうろ、面白そうなトピックを拾ってはまじまじ眺め、美味しそうだと思えば研究し、どうにも手に負えそうもなければ放り投げる…というのを繰り返してきている。

オープンアクセスについてはたいして詳しくはない。やたら元気な学友がオープンアクセスだの機関リポジトリだの大騒ぎしているので、なにやら面白そうなホットイシューがあるのだなあと思っていた程度である。もともとぼくは1980年代の情報学の研究をほじくりかえしてネチネチ研究している人間である。過ぎ去ったものをああだこうだと検討し、何があそこでは起こっていたのかという後ろ向きの事象を検討するのは得意であるが、現在進行形の事象にはコワくて手が出せない。それは自分が所属するのが社会学・思想史のゼミであることも影響しているだろうし、あるいは、ただ単に臆病なだけかもしれない。ともあれ情報収集は大事だよな、と、こんな軽い気持ちで参加したのがSPARC Japanセミナー第5回である。

しかし滅法な面白さに興奮しっぱなしであった。オープンアクセスだの大騒ぎしている前述の学友に、こんな面白い話題があるならもっと布教しろと謎の逆恨みを覚えた始末である。BioMedCentralのHubbardさんは何しろ門外漢のぼくにも分かりやすい形でビジネスモデルを語ってくれた。詳細はいくつかのブログで確認できるが、とくに面白いと思ったのがメディアの変化に伴うコンテンツの提供のかたちの変化を強調した点だ。音楽がレコード・CDからiPodに変化したことを引きつつ、紙媒体からウェブによる学術情報流通へ。メディアがコンテンツの内容を規定するといったおなじみマクルーハンの議論を連想させつつも、プラスアルファの面白さがそこにはあった。とくに感心したのは査読のカスケードだ。自グループ内にフラグシップの雑誌からリジェクト率の低い査読誌まで並べることにより、研究者にとっては一発の投稿でいずれかの雑誌に査読付きとして採録される可能性を期待させ、編集者にとっては査読コストを減少させるというアイデアだ。なるほどこれがコロンブスの卵かと思った。時間的コストを嫌う研究者と金銭的コストを厭う出版社の幸せな結婚がそこにあるようにみえた。自分の領域にもそんな雑誌は欲しい。

北海道大学の栃内先生の講演はたいそう面白かった。この興奮を共有するためにウェブにあがっている動画をぜひともご覧いただきたい。昔はエライ先生に別刷りを貰いにお願いしただの、昔いらした北大の世界的な蜂の研究者はほとんど紀要に書いていただの、科学哲学やSTSをやっている知り合い連中に是非とも首根っこふんづかまえてでも聞かせてやりたいものだった。なにしろ記述されない一世代前の常識というのは次の世代にとって調べるのが困難になるという経験則がある。第一線で活躍されつづけている栃内先生だからこそ語れることだろう。栃内先生が喋っている間ずっとなんだこりゃ面白い面白いとぼくの内なる科学少年がわいわい大騒ぎをしていたのだった。余談ながら別口の出張で北海道大学の図書館員の方々とお会いしたら「栃内ファン」を自認する方が何人もいらっしゃった。

今回のSPARC中はなぜか常にグーテンベルクの肖像が自分の脳裏にちらついていた。ぼくは現在進行形で読書史にはカブれており、読みとは何だろうか、知識が社会に拡散するとは何だろうか、と、あてもなく結論のつかぬ思索に耽ることもしばしばである。しかしまさか学術情報流通の先端のセミナーに出席しながらこんな大昔のことを思い返すとはと、一人でにやにや笑いっぱなしであった。隣に座っていた学友はさぞかし気持ちが悪かったに違いない。ともあれ読書史では、活版印刷は知を拡散させ、そして知が人々に伝達し結果、世界がハッピーになったのだという言われかたがよくされる。質疑応答では主にお金の面が重点的に議論されていたが、実のところその裏側で語られていない全自動で進行中の事象があるんだなあと思いついたら自分がチェシャ猫になるかと思った。なるほど確かにオープンアクセス運動はプラクティカルな問題、つ

次のページへ

まり電子ジャーナル価格の高騰に対抗してはじまった運動かもしれない。しかし結果として、それは低コストで知を拡散・伝播させることに他ならず、過去に起こった事象の拡大反復を行っているようにみえる。革命である。一心不乱の大革命である。ニュートンの言葉でおなじみの「巨人の肩」は、一説によると当時の背の低いニュートンの論争相手を当てこすったものであったらしいが、ともあれその巨人がじわっと動き出す瞬間を目撃させていただいたようなものである。激動の時代を愉快がることのできる立場の自分の幸福さをしみじみ噛みしめつつ、今の学術情報変革期はひょっとするとン百年に一度の面白い状況なのだからみんなも見ろ見ろ注目しろ、と自分は宣教師にでもなるべきではと自問自答中である。

「第７回 Sparc Japan セミナー 2009」参加報告
テーマ：人文系学術誌の現況 ―機関リポジトリ、著作権、電子ジャーナル

山﨑　千恵（やまざき　ちえ／京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館 学術情報掛）

人文系の論文では書誌を特定するのが困難であることも少なくない。情報探索の講義や講習会で「信頼できる先行研究者」を探すために参考図書（事典）を頼りにし、次にCiNii を使う方法をとると、参考図書で調べていたときには意気揚々としていた人文系の学生が、CiNiiの検索で苦戦し出し、逆に理系の学生が次々と論文を探しだす姿を思い出す。私の担当するILL（Inter Library Loan文献複写・相互貸借）業務でも、毎回まず論文の書誌特定兼オンライン版探しをする。論文情報がWeb上にみつからないと不安にさえなってくる現在、CiNiiの存在は心強い。メタデータでさえ、みつかれば資料、そして先行研究者に辿り着ける道がひらける。CiNiiのマネジメントを担う大向一輝准教授曰く、「見えない＝存在しない」に慣れた社会で、ミッションの一つは「見てもらうこと」だという。論文のメタデータの公開、Googleから可能になった検索、リニューアル等の成果は著しく、ここ数年のCiNii利用件数の推移が「いい環境におくと論文は使われる」ことを裏付けてもいる。そして次は科研費データベースで使用するＩＤとの照合やユーザ参加型化で著者検索を強化し、論文が人と人を繋ぐことを目指すというCiNiiの今後の躍進にも注目したい。

人文系の学術誌のオンライン化が進まない理由には以下の３点が考えられるだろう。

１．購読数及び発行元収入の減少
２．厄介な著作権処理
３．図書出版の予定（先に電子版で読める＝利益損失）

１点目は理系文系問わずオンライン化の課題だが、上智大学発行の“Monumenta Nipponica”のオンライン化は明るい例の一つだ。55機関の購読数減少があったものの、契約先データベースであるProject MUSEは収入の70％を出版社に収益として分配するため、上智大学の受け取る額は現在では年23,000ドル。確かな収入源となっている。図書館員としては学術誌を機関リポジトリへと誘いたい思いが先立つが、電子ジャーナルの高騰化に考慮しつつも、こうした収益のあるオンライン化を選択肢に入れた上で、教員に学術誌のオンライン化の提案ができればとも痛感した。

日本の学術誌のオンライン化に対する課題として、受信の体制に目を向けるべきというKate Wildman Nakai教授の提言も興味深い。受信機関が少ないことは発信の妨げにもなる。しかし購読料は安くはない。値下げ交渉のために契約体制の強化を図る大学・研究機関の連携は必須であり、SPARCにはその綱渡しの期待も寄せられた。

山本真鳥教授からは機関リポジトリのような学術情報のコモンズ的思想を推進する立場にありつつ課金モデルとぶつかる点で苦慮したという著作権を中心とする報告があった。日本の人文系学術誌では一般的に著作権は著者にある。特に人文系では投稿した論文を本にする場合があるが、その際著者に著作権がないことには出版の手続きが厄介だ。しかし著者のもつ著作権は学術誌全般のオンライン化には障害ともなりえる。

日本文化人類学会では総会の決議により「文化人類

次のページへ

学」の著作権は著者に属するものの、学会が電子媒体での公開を行う権利を有することになった。著者の所在が不明である論文の再録や翻訳の希望に対しても学会で管理できるという利点も得た。現在では過去のすべての巻号をオンライン公開し、最新一年間分はNIIを通した課金モデルを採用している。

過去の論文に対しても総会の決議一つでオンライン化を推し進めた例については質疑応答も飛び交った。私もオンラインで広く頒布する公衆送信権の侵害、論文上でテキストとは異なるオリジナル性を持つ図や写真などの著作権処理への危惧が浮かびつい慎重になる。しかし先生方からは「著作権に躊躇して公開しないことは残念」、「思い切って公開することは評価に値する」といった前向きな意見が次々と挙がった。また手間をかけて処理を加え、部分的公開を目指すといった実例（国立民族学博物館）も聞くことができた。セミナー後に京大の機関リポジトリ担当者にも意見を聞いてみた。同じく許諾処理を丁寧に行った結果、一部の図版は公開できず削除した例も数々あるという。グレーゾーンであることは否めないが、いずれにせよ学術情報流通を促進し、ひとつでも多くの公開に繋がる提案と努力を惜しまない姿勢が必要だ。

「APBioChEC'09」展示参加報告

菊井　寿子（きくい　ひさこ／社団法人 日本生物工学会）

2007年にSPARC Japan選定誌の化学系ジャーナル5誌と日本化学会の2誌で始まった化学系ジャーナル合同プロモーション活動では、これまで海外の国際学会へのブース出展を通じて、日本発の学術情報を欧米及び中国で紹介してきました（SPARC Japan NewsLetter No.1、「化学系を中心としたジャーナル合同プロモーション」参照）。活動3年目を迎え、化学系ジャーナル9誌（SPARC選定誌6誌、日本化学会の2誌、FCCAの1誌）の参加を得た今回、新たな試みとして日本国内で開催される国際会議に着目し、Asia Pacific Biochemical Engineering Conference（APBioChEC'09/第9回アジア太平洋生物化学工学会議、2009年11月24日～28日神戸国際会議場）に出展しました。

APBioChECは、生物化学工学分野における研究者間の情報交換及び連携を通じて、環太平洋地域での教育、研究開発、経済活動を活性化させることを目的に、2年毎に関係各国で開催される国際会議です。今回は「持続可能な発展のためのバイオテクノロジー」（Biotechnology for Sustainable Development）をテーマに、日本、中国、韓国、台湾、タイ、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランドなど18ヶ国から545名の参加者（うち海外266名）があり、基調講演8件、口頭発表141件、ポスター発表375件、セミナー5件が行われました。次回は2011年に上海での開催が予定されています。

APBioChEC'09組織委員会には、国内のバイオテクノロジー分野の関連学会・協会が参加しており、合同PR参加誌の発行学会からは、化学工学会バイオ部会、日本生物工学会、日本農芸化学会、日本化学会バイオテクノロジー部会が名を連ねていました。そのため会場には日頃の学会活動で交流のある先生方の姿が多く見られ、PRの主旨を説明すると、展示ブースに知り合いの海外研究者を連れてきて下さる、あるいはジャーナルの表紙をプリントしたエコバックを会場内で目立つよう

に持ち歩いて下さる等、宣伝活動にご協力頂くことが出来ました。このエコバックは希望した学会が共同出資して作成したもので、パンフレットやチラシ、見本誌を入れて配布しました。主催者の許可を得て、ポスター発表会場での配布も行ったところ、海外から参加している多くの学生達が、積極的に見本誌を手に取り、興味のある分野のジャーナルが入ったバックを喜んで受け取ってくれました。中国での展示では、見本誌が飛ぶようになくなるそうです。特にアジア圏の学生達は日本のジャーナルに接する機会が少ないようで、国内での国際会議を彼らへの出版情報提供の場として活用することは、日本をアジアにおける学術情報発信の中心地とする一助になると思われます。

展示ジャーナルへの投稿経験がある方、これから投稿を考えているという海外からの参加者の方々とも、言葉を交わす機会がありました。出版担当業務においては、メールや電子投稿システムを通じてのやりとりが主で、論文データを審査・出版の流れにシステマティックに載せることに関心が向きがちですが、論文の向こうには常に審査結果を心待ちにしている生身の著者がいることを実感出来ました。足を止めて説明を聞いてくれた韓国人の学生グループが、未来の著者になってくれることを期待しています。

実際に展示会場に立つことで見えた課題も色々とありました。一口に化学系ジャーナルといっても、必ずしも全てのジャーナルが参加者の関心に当てはまる訳ではなく、なかなか手にとって貰えない見本誌もありました。ただある程度の数のジャーナルが集まらないと、展示ブースの存在自体が目立たなくなってしまうため、その時々の会議のテーマにより近いジャーナルを前面に展示する等、メリハリを付けた宣伝活動を考えてもいいかもしれません。また他学会のジャーナルについては、年間投稿数や却下率などの質問を受けても詳細な説明が出来ないため、宣伝担当者用の説明資料を作成しておくことが望ましいと思われました。

「日本のジャーナルがこんなにあるとは知らなかった」との日本人研究者の言葉には、海外研究者だけでなく、国内の研究者に対しても宣伝活動の余地が大いにあることを感じました。また若手研究者の方からは、「日本のジャーナルは、大半の審査員が日本人なので、採点が甘いのではないかという不安がある。自信がある内容の場合、厳しい評価を求めて敢えて欧米のハイレベルなジャーナルに投稿することがある」とのご意見を頂きました。海外研究者にアピールする際は、投稿先としての魅力を訴えるだけでなく、世界中から質の高い審査員を招くためのPRという観点も意識する必要があるでしょう。そして日本人研究者には、これからの発展地域がアジアであり、そこに日本がトップジャーナルを保持することが、日本の将来に重要な意味を持つことへの理解と誇りを持って頂くことが重要です。

国内で開催される国際会議での宣伝活動は、海外及び国内の研究者に一度にプロモーションが出来ることや、開催地が近いため、複数誌の担当者が日替わりで展示会場に詰めることが出来るメリットがあります。海外PRと平行する形で、今後も国内での国際会議に出展するチャンスがあることを願っています。

謝辞

今回の合同PRは、国立情報学研究所及びSPARC Japan事務局、各学会担当者の皆様にご支援並びにご尽力頂きました。会場設営とエコバック作成には、スタンドポイントコンサルティング社にご協力頂きました。またプロモーションの場をご提供下さり、会場内での便宜を図って下さったAPBioChEC'09大会運営本部の先生方にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

CONTENTS へ

SPARC® Japan NewsLetter

SPARC Japan ニュースレター　第4号 平成22年3月
発行／大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所 http://www.nii.ac.jp/
〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号 学術総合センター
本誌についてのお問合せ／学術コンテンツ課 図書館連携チーム
TEL：03-4212-2350　FAX：03-4212-2375　e-mail：sparc@nii.ac.jp

"SPARC"の名称はARLの登録商標であり、その使用には許可が必要です。